

第七回 星槎文芸大賞

令和三年度 受賞作品集



令和三年度受賞作品

| | | |
|------------|---|----|
| 【最優秀賞】 | 小説「夢ができた日」…………… | 2 |
| | 星槎国際郡山 二年 斎藤 千陽 | |
| 【優秀賞】 | 詩「和菓子と私」…………… | 7 |
| | 星槎国際仙台 一年 佐々木悠吏 | |
| 【優秀賞】 | エッセイ「先入観と当たり前」…………… | 8 |
| | 星槎学園大宮校 二年 木口 菜月 | |
| 【優秀賞】 | 短歌…………… | 9 |
| | 星槎学園湘南校 二年 菅原 輝 | |
| 【審査員特別賞】 | 俳句…………… | 9 |
| | 星槎もみじ中学校 三年 福田 凜華 | |
| 【部門賞】 | 小説「海月珈琲店のお客様」…………… | 9 |
| | 星槎国際厚木 一年 上野 遙 | |
| 【部門賞】 | 小論文「私とコロナと未来」…………… | 17 |
| | 星槎国際湘南 二年 関塚 結 | |
| 【部門賞】 | エッセイ「星槎が肯定してくれた未来(Change)星槎で変える未来」…………… | 18 |
| | 星槎国際立川 三年 宮下 陽穂 | |
| 【部門賞】 | 詩「見つけた」…………… | 19 |
| | 星槎国際帯広 二年 宮越 葵陽 | |
| 【部門賞】 | 俳句…………… | 19 |
| | 星槎国際川口 一年 松浦はる那 | |
| 【部門賞】 | 短歌…………… | 19 |
| | 星槎学園横浜ポートサイド校 三年 小島 千寛 | |
| 【生徒会特別賞】 | 俳句…………… | 19 |
| | 星槎国際湘南 一年 沖山 遥菜 | |
| 【星槎大学長賞】 | 小論文「星槎で見つけた未来」…………… | 20 |
| | 星槎国際川口 三年 小川 夕輝 | |
| 【星槎道都大学長賞】 | 小説「異の中の蛙」…………… | 21 |
| | 星槎国際立川 中学三年 室田梨紗子 | |
| 【中学生部門賞】 | 詩「愛」…………… | 31 |
| | 星槎学園北斗校 三年 木全 弦也 | |
| 【中学生部門賞】 | 俳句…………… | 31 |
| | 星槎もみじ中学校 三年 平泉 颯 | |

夢ができた日

星槎国際郡山
二年 斎藤 千陽



俺は、ずっと親から「いい成績をとれ」「立派な会社に就職しろ」そんなことばかり言われてきた。友達と遊びに行ってもいいか聞いても毎回、「他にもやる事があるだろう」とか、「そんなことより勉強しろ」とか言ってくる。そのせいで高校生になっても、友達と遊ぶ機会が無かった。学校では、授業以外で人と接する機会は、まず無い。

家でも、親はほとんど仕事でいないし、帰ってきてても、第一声は「勉強はしているのか」「成績はどうだった」そんな言葉ばかりで、勉強や将来の事以外は話した事がほとんどないくらいだ。俺は、そんな生活が嫌で、家ではずっと部屋にこもっていた。

そんな日常のある日、本棚に目を向けた。その本棚にある、本一冊分の隙間。そこだけには、何も入れていない。いや、何も入れたくないんだ。あの本以外は。あの本とは、中学生のころ、親に秘密で手に入れた本のことだ。その本を渡してくれた人の事を俺は一日も忘れたことは無い。

あの本と出合ったのは、中学校から帰る途中にあった、とある古い本屋だった。あまり客が入っていない様子で、奥の方には、店主らしき老人がいた。そしてその周りには、たくさん本があった。俺は、本が嫌いだった。親が勝手に買って、「これで勉強しなさい」と書かれたメモを貼って、俺の机に勝手に置いていたからだ。「本は、嫌いだ」

俺はひっそりと声に出していた。本は、何も悪くないのに。俺はすぐ立ち去ろうとした。だが、奥の店主が俺を呼び止めた。

「なあ君、この本を読んでみないか？」

いきなりで、俺はそのまま何も言わずに、ただ立ち尽くしていた。そんな俺に向かって、店主はまた話し出した。

生まれて初めてだった。机のライトをつけて、俺は本を読み始めた。本の内容は、どこにでもある冒険ものだった。だが、何故かとても引き込まれて、まるで自分自身が主人公になったような気分させられる。この物語の主人公は、どこにでもいる平民の少年。彼は自分の両親に「お前は私達のために働け」「良い学校に行きなさい」と、無理難題を押し付けられていた。そんな生活が嫌になった主人公は、家を出る事を決心し、その時に「一緒に行きませんか？」と、声をかけた人がいた。いや、人ではなく、猫だった。主人公は驚いていたが、その猫と共に旅に出る事になり、自分の知らない世界を知っていく。そんな話だった。

主人公は自分と似ていた。そのせいか、本を読んだ後、俺はこう思った。「自分も同じような冒険ができるかな」と。次の日、店主に礼を言いたいと思ひ、またあの本屋に行ったが、やはり本屋は閉まっていた、その後何度も行っても会えなかった。今考えるところでも不思議な本だった。あの時以来、本はあまり嫌いじゃないし。あの店主が、本を好きになった理由もわかった気がする。だがもう、あの本は無い。

あれから一週間後、親にあの本が見つかり、捨てられた。説教も受け、「あんな本は読むな」「もっと勉強しろ」とか、色々言われた。俺は、「なんで捨てたんだ」「勝手な事をするな」と、思いっきり反論した。あんな喧嘩をしたのは初めてだった。

高校生になり、俺は部屋に鍵をかけるようにした。あれ以来、親とは一言も話していないが、その事を俺は後悔していない。「あの本、また読みたいな」本棚の隙間を見ながら、つぶやいた。

「おーい。開けてくださいーい」

ドンドンと、窓を叩く音と一緒に、声が聞こえた。俺は怖くなった。ここは三階にある部屋なのに、なんで人の声がするんだよ！

「聞こえてないんですかー。僕は君と話したいんですけどー」
俺を知ってるのか？ いや、俺の知らない声だ。一体誰なんだ。

誰なのかわからずに、恐る恐る窓の方を向いた。でも何故か、窓の向こうにいるのは、人ではなく猫だった。

「なんだ、猫か。じゃあ空耳だな」

「この本は、わしのお気に入りだな。昔のものだから、もうこの世には、同じものは無いだろう。でもこれには、この世界に残す価値があると、わしは思っている」

店主は杖をついて、本を持ちながら歩いてきた。その本はとても古びていて、タイトル文字が掠れて読めなくなっていた。

「さっき君は、本は嫌いと言ったが、わしも昔はそうだった。君の理由とは違うかもしれないがな」

店主は笑いながら言った。俺は、少し不思議な人だと思った。この人はどうやって本を好きになったのだろう。気づいた時には、もうその疑問が口から出ていた。

「どうやって、本を好きになったんですか？」

「それは、この本のおかげだよ」

店主は手に持った本を、俺に差し出した。

「君が本を嫌いになった理由は知らないが、この本を読めばきっと、君も本を好きになると思うぞ」

「すみません。今はお金が……」

「これはタダでいいさ。わしももう歳でな。この店を閉めることにしているんだ。だから、いま金を払ってもらっても、意味が無いのさ。それに……」

店主は、俺に本を少し強引に渡して、オレンジに染まり始める空を見上げて、話し続けた。

「君にも、わしがその本を読んで感じた事を感じてほしいのさ。きっとその経験が、君を良い方向に導いてくれるだろうからな」

最後の言葉は、とても深い意味を込めて、言ってくれた感じだったが、その意味までは分からなかった。ポーっとしてしまった俺に、店主は「ちよいと難しかったかの？」と言って、笑っていた。その後、俺は店主に礼を言って、帰ろうとした。その時店主は、「もう会う事は無いだろうが、これからも頑張るんだぞ。だが、無理だけはするなよ」と言ってくれた。とても嬉しかった。

俺は帰ってすぐに、部屋に入った。親の帰りが遅いおかげで、見つからずに済んだ。すぐに俺は、余っていたブックカバーを探して、本に付けた。親にバレないために。こんな事をしたのは、

「空耳じゃない！ 早く中に入れてよー！」

あれ、気のせいかな？ 一瞬そう思ってしまった。でも、気のせいではない。猫が、話しているのだ。俺は驚きながら、猫を中に入れた。

「やっとしてくれたね。ちゃんと会うのは初めてかな。改めて、こんにちは。僕はリト。君は知ってるんじゃないかな。」

白い毛並み。水色の宝石が付いた首輪。そして、黄金のような瞳。俺はこいつを知っている。こいつは、あの本に出てきた猫だ。でもあの本はフィクションだ。いるはずがない。

「ああ。だけど、なんでここにいるんだ。現実にいるはずがないだろう」

「確かにありえないね。だけど僕は今ここにいる。細かい事は気にしない方がいいよ。」

笑いながらリトは言った。よくわからないやつだと、俺は思った。理解が追い付いていない俺は、リトにここに来た理由を聞く事にした。

「なんでここに来たんだ？」

「ああ、言うの忘れてたよ」

そう言って、リトは机に飛び乗ろうとしてジャンプの体勢になった。長い尻尾がゆらゆらと揺れている。

「僕は、君を अच्छに連れて行くために来たんだよ。おりやつ！」

リトは思いっ切り机に向かってジャンプして、見事に飛び乗った。するとリトは、机にあるペンと紙を上手に啞えて、机から降りた。

「こへかひへもい？」

「啞えたまま喋られてもわからねーよ」

「これ借りてもいい？」

「いいぞ。勝手に使え」

啞えた物を床に置いて、リトは言い直した。俺はベッドに座り込んで、また話しかけた。

「お前が言ってた、『 अच्छ』ってなんだ？」

「僕のいた所さ。もつと詳しく言うなら、あの本の世界かな」
リトは二本立ちになって、器用にペンを持ち、紙に何かを書き始めた。

その姿は、まるで人間のようだ。

「あの本って、お前が登場人物の本の事だよな。何故俺を連れて行きたいんだ。というか、どうやって行くんだ」

「方法はあるよ。もちろん、君を連れて行きたい理由も。でも理由は言いたくないんだ。まあ、僕のことは信用していいと思うよ。だから少し待ってて」

「まだ行くとは言っていないぞー！」

こいつはあの本の猫と同一人物なのか？

俺は疑問に思った。特徴だけでなく、口調や性格も似ている。だが、フィクションのキャラクターが、現実にいるのはありえない。考えていると、リトがペンを置いて近づいてきた。

「それじゃ、行こっか」

「だから行くとは言っていないぞー！」

「拒否権は無いぞー。ほら、行くよ！」

リトは、さっきまで何か書いていた紙を強く踏んだ。すると、いきなり床が光りだした。よく見ると、紙に書いてあったのは、魔法陣のようなものだった。

その紙を中心に、書かれている魔法陣と同じものが、床全体に広がり、リトの姿も見えなくなっていく。おれはあまりの眩しさに、目を開けていることができなくなった。

「おーい、起きろー。着いたぞー」

リトの声がする。俺は目をゆっくりと開いた。目の前には、とても澄んだ青空が広がっていた。どうやら、気を失っていたようだ。

俺は起き上がって、周りを見渡した。どこまでも続く草原。雪を被って白くなっている山脈。反対には、城を中心に竹む大きな町がある。間違いない。ここはあの本の世界だ。俺はそう確信した。

「おーい。僕の事、忘れてない？」

「あつ、ごめん。まだこの状況を理解しきれていないんだ。少し説明してくれ」

俺はリトにロープを軽く広げながら聞いた。すると、リトは目の前で背伸びをしながら話し出した。

「魔法を使ったんだよ。こんな風に」

そう言うリトは、前脚を空(くう)に伸ばし始める。すると、そこに穴が現れて、リトはそのまま脚を入れて、カバンを穴から取り出した。

「この魔法は収納ができるんだよ。すごいでしょ？」

「あーすごいすごい」

ドヤ顔でそう言ったリトに、俺は無表情で言葉を返した。するとリトは、少しすねた顔をして、さつき出したカバンの中に入った。理由を聞くと、「町は人が多いから僕は歩きにくい！」

と、すねたまま言われてしまった。俺は頷いて、仕方なくカバンをかけて、また歩き出した。

友達というって、こんな感じなのかなと思いつながら。町に入ると、屋台や出し物があり、上を見ると、星の形をした飾りが吊るされていた。今日は祭りの日ようだ。

「今日は、この町の誕生祭の一日目なんだ。昼は町の至る所に屋台が出て、人が行き交う。夜はこの町の人たちが、城の門の前に集まって、この時期に見られる流星群に、感謝を伝えるんだ」

「だからこんな人がいるのか。これだと歩くのも一苦労しそうだ」

「慣れれば楽しいと思うよ」

機嫌が直ったリトは、カバンから顔を出して、元気な声でそう言った俺は少し安心して、「そうだな」と返した。俺達は人を見つけながら、屋台を見て回った。どこも人が多く、休む場所も無い。俺は疲れ切った状態で、ある屋台の前にとり着いた。

「すみません。少し休ませてもらってもいいですか？」

「ええ。大丈夫ですよ」

俺は、そう言ってくれた屋台の女性店員に深くお辞儀をして、近くの椅子に座った。すると、リトがカバンから顔を出した。

「僕も休んでいいかな？」

「別にいいけど、猫が人の言葉を話してたら騒ぎになるんじゃないか？」

「じゃあ、せっかくだし散歩しながら話そう。目的地はあそこ、「スターリットタウン」だよ」

そう言ってリトは、草原を歩き出した。俺は、少し混乱したまま、リトについて行った。

スターリットタウンは、あの本の主人公が最初に向かう町だ。旅の道具や食料を、少ない有り金で買い、お金を稼ぐため、冒険者として登録したりした町だ。俺はそんなことを思い出しながら、リトに質問をした。

「どうやって俺をここに連れてきたんだ？」

「あれ、覚えてないの？ 魔法陣。僕が魔法を使って、君を無理やり連れてきたんだよ。覚えてると思ったんだけど」

「あれを一回見ただけで信じると思うか。現実には魔法なんて無いんだぞ」

「あつ！ そっかー！」

リトは笑った。まるで子供のよう。そして俺も、つられて笑っていた。笑えたのは、いつぶりだろう。ずっと、親以外と接する事が無く生きていた俺にとって、笑うという事はあまり無かった事。それに気づいた俺は、自分自身がこの世界にいる事に、喜びを感じている事を知った。笑っている俺を見たリトは、「笑ってくれたね」と言った。俺はそう言われた瞬間、反射的に顔が見えないようにした。

「君、これを着て」

しばらく歩いたら、リトがそう言って俺にロープを見せた。

「なんでだ？ このままじゃダメなのか？」

「ダメに決まっているよ！ 君の服はこの世界に無いものなんだから。すごく目立つよ」

確かにそうだ。目立って怪しまれたら、最悪、自由に行動できなくなるかもしれない。それだけは絶対に避けたい。せめて今だけは。俺は納得して、ロープを着た。あまり着る機会が無いから、少し新鮮だった。

「そういえばこれ、どこから出したんだ？ バックとか持っていないのに」

俺は小声でリトに聞いた。もし騒ぎになったら厄介だし、もうこれ以上疲れたくもない。

「それなら大丈夫。この世界だと、僕みたいに喋れる動物は珍しくないし。人によっては、そういう動物と一緒に人生の一時(いつとき)を過ごしたりする人もいるよ」

「そうなのか。それなら問題なさそうだな。今出してやるぞ」

俺はカバンを下ろして、中からリトを出してあげた。リトは背伸びをして、近くの椅子に飛び乗り、体を目の前にある調理台に向けて傾けた。多分、この料理に興味津津なんだろう。

「ねえ！ この料理、食べてみようよ！」

「そう言うとは思ったけど、お金が必要なんじゃないか？」

「大丈夫！ 僕の財布があるから。だから食べよう！」

リトは目をキラキラさせながら、財布を魔法で取り出す。まるで、祭りではしゃぐ子供のように。それなら大丈夫か。俺はそう思い、メニューをリトに見せた。

「ワイー！ ほら、君も選んで！」

「えつ、俺もか？」

「だって君、たくさん歩いて疲れてるでしょ。ならちゃんと食べないと！」

そう言ってリトが、前脚でメニューを指した。確かに腹は減っているが、この世界の料理がどういうものかわからないため、戸惑っていた。その様子を見た店員が、声を掛けてくれた。

「あの。おすすめは「魚の切り身と野菜のスープ」です」

「あつ、じゃあそれで。すみません」

「いえいえ。そちらの猫さんは何にしますか」

「僕は焼き魚で！」

「わかりました。少々お待ちを」

そう言って店員は、調理をし始める。リトに対しても店員は普通に接していた。どうやら本当に、喋る動物は珍しくないらしい。俺は少し驚いた。そんな俺にリトは話しかけてきた。

「楽しいかい？」

「多少は楽しいけど、やっぱり疲れる。人混みにはあまり慣れてい

ないんだ」

「そっか。でも、少しだけでも楽しいならよかったよ」

リトはそう言って笑った。だけど、どこか曇った表情だった。俺は理由を知りたくて、また話をしようとした。すると屋台の店員が、注文した料理を出してくれた。

「お待ちせしました。スープと焼き魚です」

「あつ、ありがとうございます」

「やったー！ いっただっきまーす！」

リトは焼き魚をとって、すぐにかぶりついた。すごい食べっぷりで少し驚いた。そんな俺も、少し熱いスープの器を取って、スプーンで具とスープを口に入れた。そのスープは、俺が今まで食べたことのない味だった。

「うまいっ！」

俺はその時、思い切り大声でそう言った。すぐに俺はそれに気づき、周りを見た。今日は祭りで、周りの音自体が大きいので、あまり目立ってはいなかった。だけど、少し恥ずかしくなり、深くうつむいた。

「アハハ！ 君、恥ずかしくなってるの？ 自分で大声出したのにさー！」

「うるさいなー」

リトが笑い、俺は言い返した。こいつと会ってから、こんなやり取りが多くなった気がした。俺は楽しくなった。すると店員が、俺達に話しかけてきた。

「お料理、いかがですか？」

「とってもおいしいよ！」

「すごくおいしいです！ こんな料理、初めて食べました」

「気に入ってもらえてなによりです」

店員はそう言って笑った。その笑顔は、俺が見た事の無いもので、そしてそれは、自分自身が人と関わらなかった事で、ずっと得られなかったものだった。そんなことを考えていると、リトが焼き魚をたいらげて、俺を急かした。

「ねえねえ！ 早く他の所も行こうよ！」

けど、この一日のおかげで、少しだけ自分を変えられる気がする。そう思った俺に、一つ夢ができた。「どうやら、自分で一歩踏み出せたみたいだね。早く来て。準備ができたよ」

リトはゆっくりと俺に近づいてきた。その時のリトは、安心して笑顔を浮かべていた。理由はわからなかった。そして俺は、少しモヤモヤしながら、リトが書いた魔法陣の近くに立たされた。すると魔法陣が光を放ち出した。

「おい！ いきなりかよ！」

「しょうがないでしょ、時間無いんだから。せめてものお詫びに、僕からのお土産を送っておくから、楽しみにしててよ」

やっぱり最後まで勝手なやつだ。そんなことを考えながらリトを見つめた。これで、会うのは最初で最後だろうと思った。その瞬間、ある質問が口から出ていた。

「お前は、一体何者なんだ」

その問いに、リトはこう返した。

「君自身で、答えを見つけて」と。

その言葉を最後に、また俺は、気を失った。目が覚めると、俺は自分の部屋のベッドに横たわっていた。俺はすぐに部屋を歩き回った。リトの言っていた「お土産」を探すために。それは思ったよりも早く見つかった。それは、本棚の隙間に入っていた。忘れるはずがない表紙と、隙間にちょうど収まる厚さ。あの時親が捨てた、大切な本だった。しかも、新品のように綺麗だった。俺はすぐに机に座って読もうとした。すると机には、会った時リトに貸したペンがあった。もしかしてと思い本を開くと、魔法陣が書かれた紙が挟まっていた。俺は泣きそうになった。

「ただいま」

玄関から母の声がした。泣く暇は無かった。

「行くか」

俺は目を擦って、少し出た涙を、服の袖で拭いて、ドアを開けた。夢を叶えるために。

俺の夢は、旅をしている人に出会い、それを小説として残すこと。初めてできた、やりたい事。俺はこの日から日記を書く

「食うの早すぎだろ！ わかったから、ちよっと待ってろ」

俺はそう言って、急いでスープを食べた。その間にリトは、料理の会計を済ませて、カバンの中に入っていた。

スープを食べ終わってすぐ、俺はカバンを肩にかけて、「ごちそうさまでした！」と言いながら、店を出ようとした。すると店員が、俺達に手を振った。

「ありがとうございます！ また来てくださいね！」

リトは顔と前脚を器用に出して、手を振り返していた。そして俺は、入った時と同じようにお辞儀をして、店を出た。あの時の店員の姿と言葉は、俺が初めて感じた、人の温かさだった。

あの後も町を回って、知らないものをたくさん見て、たくさん知った。そしてすぐ夜になってしまっただけで、俺達は町を出て、最初にした草原に戻った。

「あー疲れたー」

「君、『疲れた』しか言わないねー。楽しくなかったのかい？」

「いや、楽しかったけどさ」

俺は笑いながら言った。こんなに笑ったのは初めてで、ずっとここにいたいと思った。だけど、それは無理だった。

「そろそろ、帰りたい？」

「帰らないといけない、だろ」

「あらあら、気づかれてたか。そうだよ」

そう言ってリトは、来た時の紙とペンを魔法で出して、紙の裏に魔法陣を書き出した。

「君みたいな違う世界の人が、この世界にすぎると、世界のバランスが崩れるんだよ。でも、一日ぐらいなら問題無いんだ」

ペンを走らせながら、リトは理由を話した。だけど、その時の俺にはあまり聞こえていなかった。俺に聞こえていたのは、冷たい夜風が草原を流れる音だけだった。俺はその音を聞きながら、星が輝く夜空を見上げた。そして目に入ったのは、星よりも光り輝く流れ星だった。流れ星は少しづつ増えていき、すぐに夜空を覆う流星群となった。その輝きは、俺の心に「希望」という光をもたらしにくれた。今日という日は、流れ星のように過ぎていく

事にした。俺自身の物語を。あの本のタイトルは「希望を見つけるまでの旅」だった。なら俺の物語には、こんなタイトルをつけよう。「夢を叶えるまでの日々」と。

【優秀賞 詩部門 受賞】

和菓子と私

星椋国際仙台

一年 佐々木悠吏



私は和菓子が好きだ 和菓子と私
言葉はにているけれど

和菓子は甘い

私は詰めが甘い

にているけれど すこし違う

和菓子は鮮やかだ

私は地味だ

にでないけれど すこしにている

和菓子は私にない物をもっている

私は和菓子にない物をもっている

だから私は和菓子が好きだ

【優秀賞 エッセイ部門 受賞】

「先入観と当たり前前」

星槎学園大宮校
二年 木口 菜月



「通信制」なんて不良みたいな人たちが行く学校だ。私が抱いていた通信制高校に対する印象は正直、「最悪」だった。

中学卒業後、私は当たり前のように全日制の高校へ進学した。そんな私は、進学した高校にだんだん通えなくなり、夏休みが明けたと同時に「星槎学園大宮校」へ転入した。そこで私は、二つのことを星槎で学んだ。

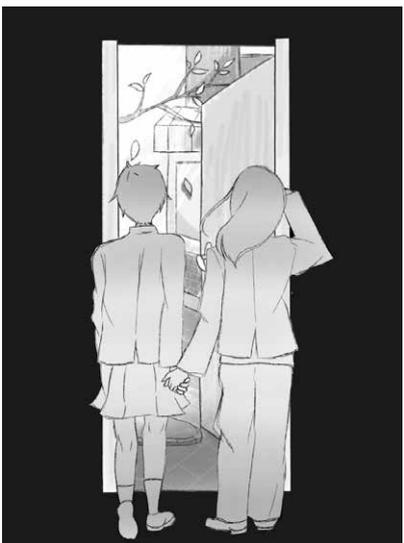
まず一つ目、私が抱いていた「通信制に対するイメージ」が間違っていたということだ。私が想像していた絵に描いたような不良はいなかった。そして、中学校の先生が「レポートの量が多すぎて卒業できず退学してしまう」と言っていたことはまったくなかった。レポートは基本、授業中に行う。例えば授業に出席できなかったとしても、自分で計画立てて行えば、課題がたまることもない。思っていたより大変だと感じることもなく、学校からの課題も負担になるほど多くないということが分かった。このことから私は、「自己管理の大切さ」を学び、「自分を律する」ことの重要性について考えるようになった。さらに、中学生の時よりも、時間を有意義に使えるようになったと実感している。

そして二つ目、私が「当たり前前」だと思っていたことは、本当は「当たり前前ではない」ということだ。例えば、「校則の必要性」を今まで考えたことはなかった。それが「当たり前前」のことであり、「普通」のことであったからだ。疑問視し声を上げることなど頭になかった。しかし、星槎には「校則」がない。「校則のない環境」に置かれた今、これまでのことを振り返る。今まで私が、「当然のように守ってきたものはいったい何だったのだろうか？」そう考えるようになった。服装や髪型、髪色は集中力や成績には関係しない。むしろ好きなものを身に付けている方がよっぽどモチベーションが上がる。

中学生の頃、先生がスカートの長さを指摘する際に「秩序を乱すな」と言っていた。私は、それぞれ人によってルールに対する考えが違

うのではないかと思う。また、ルールは、良い事と悪い事がぶつかることを防ぐために存在すると思う。「秩序」とは、社会・集団などが、望ましい状態を保つための順序やきまりを指すため、守るべきものとして、本能的に備わっているものだと考える。しかしながら、「乱す」ということは、「作爲的に乱している人」がいるという考え方であると思うため、矛盾しているのではないかと考える。

以上のことから私は、星槎で学校生活を送る中で、今まで自分が思っていた考えを改めることが多くなった。それくらい、自分では考えつかなかったことを考えるようになった。星槎に転入した時の感情と現在の感情は、真逆だと言っ



「カラフル」
井上 里葉 (星槎国際八王子2年)

【優秀賞 短歌部門 受賞】

星槎学園湘南校
二年 菅原 輝



仲秋の 小雨降る夜 帰り道 雲にばやける
月の寂しさ

【審査員特別賞 俳句部門 受賞】

星槎もみじ中学校
三年 福田 凜華

外へ出て 肌にささった 西日の矢

【部門賞 小説部門 受賞】

星槎国際厚木
一年 上野 遙



朝の八時。家からさほど離れていない自分が経営している店に向かう。店のすぐそばに海があり、朝の海は太陽の光を反射してキラキラと綺麗に輝いている。その景色を見る度に、俺は今日も生きて

いるんだと実感する。
店に着き、裏口の扉を開けて、開店準備をする。仕込みが終わり、慌てて出入り口の扉を開く。外に出ると、潮の香りがする。この香りが俺は好きだ。そして開店の看板を出した。

開店の時間だ。

この店の名前は海月珈琲店。もともとは俺のじいちゃんが経営していた店で、今は俺が継いでいる。俺は父さんと母さんを交通事故で亡くして、俺はじいちゃんとはあちゃんに引き取られた。じいちゃんとはあちゃんは厳しいが優しくとてもいい人だ。そんなじいちゃんは三年前、肺癌で亡くなった。俺は誰よりもじいちゃんが大好きだったので、大人になったのにも関わらず、まるで小さな子供みたいに葬式で泣きじゃくった。

開店から三十分経って、扉の開く音がした。
入って来た人を見ると、いつもこの店を御鼠肩にしている七十代の女性の山本さんだ。
「いらっしやいませ、山本さん」
そう俺が言うと山本さんは笑顔で、
「おはよう。いつも元気でいいわね」と言った。

山本さんはゆっくりとカウンターの席に向かい、座った。
「いつものやつ、お願いしてもいいかしら」
「はい。少々お待ちくださいませ」
早速準備にとりかかり、出来たコーヒーをカウンター席に置く。
「あら、ありがとう。じゃあいただくわね」
山本さんは、一口コーヒーを飲んだ。
「やっぱり大貴君の淹れるコーヒーは美味しいわね」
「ありがとうございます。でもやっぱり祖父の淹れるコーヒーの味を再現するのは難しいです」
「でもこのコーヒーは大貴くんらしい味でとても美味しいわよ」
「ありがとうございます。もっと美味しいコーヒーを淹れられるように頑張ります」
色々と話し込んでいると、扉の開く音がした。
「いらっしやいませ」
顔を上げると大塚さんがいつもの様に笑顔で

「おはよう。海月君。いつものお願い」
そう言うって大塚さんは山本さんの隣の席に座った。
俺と大塚さんは高校時代の友達で、たまにこうした平日の朝に来店してくる。

「おはようございます。山本さん」
「おはよう加奈子ちゃん。今日、会社は休みなの？」

「はい。今日は有休をとってるんです」

山本さんと大塚さんが話している間、俺は紅茶と近くのケーキ屋で仕入れているクッキーを準備した。

大塚さんは山本さんと話しながら、クッキーと紅茶を口に運んだ。
「美味しい」と言ってる顔がほころんだ。その顔を見て俺はとても嬉しくなった。

山本さんがゆつくりと立ち上がって、
「今日は加奈子ちゃんとも話せたし、美味しいコーヒーも飲めてとても楽しかったわ。お会計お願いしてもいいかしら」
と笑顔で言った。

会計をして山本さんは、
「楽しい時間だったわ。また来るわね」
と優しい声で言った。

俺は、
「はい。またのご来店お待ちしております」
満面の笑みで言った。

山本さんはじいちゃんが生きていた頃からこの店に通っていて、ほとんど毎日来店していたらしい。山本さんはじいちゃんの淹れるコーヒーを毎回頼むほど大好きだったらしく、じいちゃんが亡くなった時、葬式に来て静かに泣いていた。

今は俺がこの店を継いで働いているが、山本さんは今でもじいちゃんが帰ってくるんじゃないかと思っている。その話を聞いたのは去年の夏だ。その日はじいちゃんの命日で、山本さんはじいちゃんの大好きだった向日葵を持ってきて俺の淹れたコーヒーを飲んだ。飲み終わった後に、

小さな声で「美味しい」と言ったのが聞こえた。その言葉を聞いて俺はたまらず嬉しくなった。
それにしてもこの女性はとても綺麗だ。例えるならば花畑の中に一輪だけ咲いている白いユリの花のような人だ。たくさんの花が咲き誇っている中、ただ一輪、どの花にも負けないような凛とした佇まいで静かに綺麗に咲いている。そんな感じだ。
皿を拭いて女性のほうをチラッと見ると、女性と目が合ってしまった。目が合って、一体どんな風にすればいいんだろうと頭の中で悶々と考えていると、女性はくすくすと笑って、
「どうしたんですか？」
と微笑みながら聞いてきた。

俺は何を血迷ったのか、
「綺麗だなと思って」
と、心の中で思ったことを声に出してしまった。言った瞬間「やっちまった」と心の中で絶望した。
すると女性はまたくすくすと笑って、
「ありがとうございます。そんなこと言われたことなかったのよ」と優しい声で言った。

その言葉を聞いて、俺はもつとこの人のことを知りたいと思った。そう思ったのと同時に、俺はこの女性に恋をしていると気づいた。だからこの人のことをもつと知りたいなんて思ったんだろう。そんなことを考えながら、俺は女性に話しかけた。
「あの、大変おがましいのですがお名前を聞いてもよろしいでしょうか」
「私の名前は雪野海月です。大貴さんの苗字と同じ漢字ですよ」
と雪野さんは言った。そこで俺は疑問に思った。
「なんで俺の名前を知っているんですか。名前を教えた記憶はないのですが」

そう俺は疑問に思ったことをただ率直に言った。
すると雪野さんは少し戸惑うような顔をした後、また凛とした顔立ちに戻って衝撃的なことを言った。
「大貴さんの祖父、恭介さんとはお会いしたことがあるんです。その

「この日になるといつも恭介さんが戻って来るんじゃないかと思うの」
と言っていた。恭介とは俺のじいちゃんの名前だ。そしてその後山本さんは、
「もう一回でいいから恭介さんの淹れたコーヒーを飲みたいわ。もちろん大貴君の淹れるコーヒーも好きだけど、やっぱり死ぬ前にはあのコーヒーを飲みたいわね」
そう言うっていた。

だから、そんな山本さんが好きだったじいちゃんの淹れるコーヒーをまた飲んでほしいと思ひ、一人でコーヒーの研究をしている。客足も徐々に少なくなり、いつの間にか閉店時間の一時前になっていた。

そろそろ閉店準備しようかなと思った時、扉の開く音がした。お客さんかな。そう思い扉の方を見ると、一人の女性が入って来た。その人は白い花柄のワンピースを着ていて、扉から入って来た風が女性の長い黒い髪を靡かせていた。

その姿を見て俺は綺麗だと思った。そう思ったと同時に俺の心臓が速く鼓動を打った。
女性がゆつくりとカウンター席に座りメニューに目を通した。

その間も俺の鼓動は速く、心臓を落ち着かせようと深呼吸をした。すると女性が、
「すみません。コーヒーを頼んでもいいですか？」
と綺麗に澄み切った声で言った。

「はい。かしまりました」
俺は少し裏返った声で注文を受けた。慌てたが、バレないよう平然と装ってコーヒーを淹れた。
「お待たせしました。こちらコーヒーです。お好みで砂糖とミルクを淹れてください」

そう言うのと、女性は「ありがとうございます」と笑顔で言った。その笑顔を見て俺は顔に熱が集まるのを感じた。この顔を見られるとマズいと思ひ下を向きながら皿を洗う。チラチラと女性を見ると

時に大貴さんのことを聞いて。今は大貴さんがこの珈琲店を継いでると聞いて、今日ここに来たくなんです」
じいちゃんから店に来たお客さんの話をよく聞いていたが、この話は初めて聞いた。こんな綺麗な人と接点があったのに教えてくれないなんて、と少しじいちゃんのことを恨んだ。
雪野さんのほうを見ると、少し悲しそうな顔をしていた。
「すみません。急に恭介さんの知り合いと言って、このお店に来てしまった。もし嫌ならもうここには来ないので大丈夫です」
と雪野さんは言った。

俺は慌てて
「いえ、そんなこと思ってないので大丈夫です。祖父の周りには、お年を召している方が多くて、雪野さんみたいな若い女性が祖父の知り合いだということに驚いてしまってます。それにそんな話、祖父から一度も聞いたことがなかったのです。勘違いをさせてしまひすみません」と少し早口で言った。

すると雪野さんは目をパチクリさせた後、少し頬を赤らめて恥ずかしそうに、
「い、いえ。私も勘違いしてしまひすみません」
俺と同じくらい早口で言った。

頬を赤らめている雪野さんを可愛らしいなと思ひながら見ているとまた目が合って、二人同じタイミングでクスリと笑った。
すると雪野さんはゆつくりと席を立ち、
「お会計お願いしてもいいですか」
と言った。

俺はその言葉を聞いて少し悲しくなった。
お会計を終え、雪野さんは扉のほうに向かった。すると雪野さんはくると俺のほうを向いて、
「コーヒー美味しかったです。また明日ここに来てもいいですか」と照れていたのか少し小さな声で言った。
俺はその言葉に嬉しくなり、
「はい、お待ちしております！」

と店内に響くほど大きな声で言った。
雪野さんは少しだけ笑い、
「ではまた明日」
と手を振り店の扉を閉めた。
俺はその姿を見て静かに悶えた。

開店の一時間前。俺はコーヒートの研究をしていた。コーヒートを作っ
ては一口飲んで作り直し、また作っては一口飲んで作り直しを何度
も繰り返し続けた。だが、いつまで経ってもじいちゃんの味にはた
どり着かない。そうしている間に、開店時間間際になった。慌てて
店の扉を開け、看板を出した。

そういえば今日も雪野さんは来ると言っていた。一体いつ来るの
だろうかとワクワクとしてしていると、扉の開く音がした。
「いらっしやいませ」
扉を開けて店の中に入ってきたのは、山本さんだった。

山本さんはいつもの席に座った。
「今日もいつもの席に座るか」
と聞くと、

「ええ、そうしようかしら」
とおっしゃったので、俺は直ぐにコーヒートを淹れた。コーヒートカッ
プを差し出すと一口飲み、いつもと同じように、「美味しいわ」と言っ
た。でも表情を見る限り、やはりじいちゃんの味には近づけていな
いようだった。

一体どうしたらじいちゃんの味に近づけるのか。そんなことを考え
ながら次のお客さんが来たので、注文を受ける。

そんなこんなでもう閉店の一時間前になってしまった。今日はい
つもお客さんが多かったので、朝に研究をして以来、じいちゃ
んの味にどう近づけるかなんて考える暇がなかった。

そして今、店内にお客さんはいない。
そういえば雪野さんはまだ来ていない。昨日は来ると言っていた
が、もしかしたら何らかの用事が入って来れなくなってしまったの
ではないか。そう思うと胸のあたりがキュッと苦しくなった。

「いえ、恭介さんのあのコーヒートを再現する手伝いができるのがとて
も嬉しいので大歓迎ですよ」
そう言われて俺はじんわりと胸が温かくなるのを感じた。

「ありがどうございませ」
俺は全身全霊で感謝を伝えた。

雪野さんはそんな俺を見てふふっと小さく笑った。

そんな面白かったのかな。少し恥ずかしくなりながらも俺は嬉
しさをいつばいだった。

「あ、もうそろそろ閉店の時間ですね」
「本当だ」

雪野さんが言った言葉で、俺はもうすぐで閉店時間なのだという
ことに気づいた。

「今日はありがどうございませ。協力してくれると言っていただ
いでも嬉しかったです」

「いえ、こちらこそ協力できるなんてとても光栄です。また明日こ
に来ますね」

「はい。ご来店ありがどうございました」

雪野さんの後ろ姿が見えなくなるまでずっと見つめていた。

俺は看板を下ろし扉の鍵を閉め、後片付けを始めた。
今日はいつもより多くのお客さんが来たので、どっと疲れた。
でも、雪野さんはまた来てくれると言っていたし、コーヒートの研究
を手伝ってもらえるので明日がとても楽しみだ。

そう俺はウキウキしながら、店の戸締りをして家に帰った。

翌日、閉店一時間前になると雪野さんが来店してきた。
「いらっしやいませ」

雪野さんはいつもと同じカウンター席に座った。
「えっと、それじゃあコーヒートを試飲していただけますか」

俺は研究したコーヒートを淹れ、カウンターに置いた。
雪野さんは一口飲む。少しドキドキしながら見ていると、雪野さ
んは口を開いた。

「少し味が薄い気がします」

店の扉が開く音がした。もしかして雪野さんかな。そう期待して顔
を上げると、そこには雪野さんが立っていた。

「いらっしやいませ」
「こんにちは。大貴さん」

凛とした顔で雪野さんは昨日と同じ席に座った。メニューを見て
いる雪野さんを僕は眺めた。きつと雪野さんは俺がこんなにもドキ
ドキしてあなたのことを好んでいるなんて知らないんだろうな。

「今日もコーヒートを頼もうかしら」
そう注文を受けたので、早速コーヒートを淹れた。

「お待たせしました」

雪野さんの座っている席にコーヒートを置く。
そういえば雪野さんはじいちゃんに会ったことがあると言ってい
たけど、じいちゃんのコーヒートを飲んだことがあるのだろうか。

思い切って聞いてみることにした。
「雪野さん」

「はい？」

「雪野さんは祖父のコーヒートを飲んだことがあるんですか？」

「はい。一度だけ。でも恭介さんの淹れたコーヒートはとても美味し
かったので今でも味を覚えてます」

顔をほころばせながら雪野さんは言う。
「あの、もしよければ一緒に祖父のコーヒートを再現するを手伝っ
てもらえないでしょうか」

突如思い浮かんだ案をそのまま口に出してしまった。
何馬鹿なこと言ってるんだ俺は。何でも思ったことを素直に口に
出してしまふこの性格に俺は腹を立てた。きつと雪野さんも困っ
ているはずだ。謝ろう。そう思い顔を上げる雪野さんはびつくりし
た顔から微笑んだ。

「ええ。勿論いいですよ」
と言った。

予想していなかった言葉に俺はポカーンとした。すぐハッとして、
「で、でもやっぱり迷惑ではないですか」

困惑して慌てて言う。

「そうですね」
その言葉に少しへこんだ。俺も一口飲むと確かに味が薄い気がし
た。

「コーヒート豆の分量とかどうなさっているんですか」
その言葉に俺は少しドキリとした。

「実は、祖父が俺に言ったコーヒート豆の分量は曖昧なんです。詳しい
分量を聞こうと思ったときには、祖父は病気がかかって亡くなって
しまったので」

「そうですね」

俺は何とも言えない気持ちになった。じいちゃんの味を思い出し
ながら試行錯誤してみたがどれも失敗に終わっていた。

「そういえば恭介さんはベーターベンが好きだと言っていたのです
が、それは本当なんですか」

急に雪野さんは祖父の話をした。
「はい。家でもよくベーターベンの曲を聞いていました。でも、どう
してベーターベンの話を？」

「ベーターベンはコーヒートをよく飲んでいて、コーヒート豆はきつちり
六十粒豆を挽いて飲んでいました。もしかしたらベーターベン
に影響されて、六十粒のコーヒート豆を挽いているのかもしれないか
と思っただけ」

雪野さんの言葉を聞いて確かに、と思っただけ。じいちゃんは影響を
受けやすい性格だった。もしベーターベンのコーヒート豆のことを知っ
ていたとしたらその可能性はありえる。

俺はすぐにコーヒート豆を六十粒挽いて、コーヒートを作った。
作り終わり、雪野さんと僕はコーヒートを一口飲んだ。その瞬間、
俺の鼓動は速くなった。

じいちゃんの作ったコーヒートに限りなく近づいたからだ。

雪野さんも俺と同じような表情をして驚いていた。
「恭介さんのコーヒートの味に近づいていますね。それにしても、本当
に六十粒だなんて」

雪野さんは驚きと笑顔が混ざったような顔をした。その顔を見て
少しドキリとした。雪野さんってこんな顔するんだなあと一人悶え

た。

「大丈夫ですか？」

雪野さんは俺の顔を見て心配そうに聞いてきた。

「だ、大丈夫ですよ。祖父の味に近づいてびびりしているだけです」俺は慌てて言ったが、雪野さんは気にすることなくまたコーヒールを一口飲んだ。

「恭介さんの味までもう一歩ですね。そろそろ閉店時間なので私とも帰りますね」

俺は雪野さんが何故いつも閉店間際に来るのか疑問に思った。何か用事があるのだろうか。今まで気づかないふりをしていたが、雪野さんは何か隠していることがある。いろんなお客さんを見ているとわかる。

でも、それは雪野さんが話したいと思える時になったら聞こう。そしてじいちゃんの作ったコーヒールを完璧に再現出来たら告白しよう。そう心に決めた。

「大貴、お前は幽霊を信じるか」

じいちゃんが言った。もうこの世にいないじいちゃんが目の前にいる。

そうだ。きつとこれは夢だ。そう自覚した。

「信じるよ」

俺が小さい頃からじいちゃんは靈感があると聞いていた。そしていつも幽霊を信じて聞いてきた。じいちゃんは嘘をつかない。それを知っているから俺は幽霊がいることを信じている。

「大貴。幽霊がこの世にいるというのはその幽霊がこの世に未練があるということだ。もしそんな幽霊を見つけたら助けてあげなさい」

なんでそんなことを言うんだろうか。

「じいちゃん。それって一体どういうこと」

そう言うと、じいちゃんの姿は霞んでいって、消えた。そこで目が覚めた。

一体じいちゃんはどのようにしてあんなことを言ったのだろうか。だん

「いらつしやいませ、山本さん。」

「おはようございます。いつものお願いできるかしら」

「はい。かしこまりました」

注文を受けて、俺はコーヒールを作る。

やっと山本さんにじいちゃんのコーヒールを飲んでもらえる。俺はドキドキしながら山本さんがコーヒールを飲むのを待つ。そして山本さんがコーヒールを一口飲んだ。

すると山本さんが驚いたのか目を見開いた。

「これって」

「祖父の味を研究したんです。やっとたどり着きました」

そう言うと、山本さんは目に涙を浮かべ、静かに泣いた。

「ありがとう。死ぬ前にまた恭介さんのコーヒールを飲めるなんて。私は幸せ者ね」

山本さんは微笑み、また静かにコーヒールを飲んだ。

「ありがとう。本当にありがとう。また明日も来るわ」

山本さんはコーヒールを飲み干し、そう言って会計をして店を後にした。

そして雪野さんがいつも来ている閉店一時間前になった。来るの

だろうか。ワクワクしつつ、心配しながら待っていた。

丁度店には誰もいなくなった。これなら二人で話せるだろう。そんなことを考えていると扉の開く音がした。

「いらつしやいませ。雪野さん」

「こんにちは。コーヒール、いいですか」

俺はドキドキする心臓を必死に落ち着かせようと深呼吸をした。

コーヒール豆を六十粒挽き、九十四度のお湯で注いだ。

そっとコーヒールを雪野さんの席に置く。

雪野さんは静かにカップを持ち上げ、一口飲んだ。

すると雪野さんは、山本さんと同じように目を見開いた。

「再現できたんですね」

だん夢の内容が薄れていく。だけどじいちゃんが言っていた言葉だけは何故だか頭の中に残っている。

いつものように店を開けると、二十分経った頃にお客さんがやってきた。

お昼時になると昨日よりも多くのお客さんが来店した。

閉店時間一時間前になっても、珍しく今日はまだお客さんがいた。雪野さんは来るのだろうか。そう思いながら皿洗いをする。

「ただど雪野さんはいつまで経っても来ず、閉店時間になった。」

今日は何か用事があったのか。それとも体調がよくないのだろうか。

明日は来てくれるといいなと思いつつ、看板を下ろした。

看板を下ろした後、俺はコーヒールの研究を始めた。コーヒール豆の分量がわかったので、次に、大切なお湯の温度を試すことにした。

まずはいつもの温度で試してみるが、やはりあともう一歩ということだ。

次に、お湯の温度を百度にしてみた。

だが、これも失敗に終わった。

それから何度もお湯の温度を変えて挑戦した。

九十四度で試して一口飲んだ。その瞬間、じいちゃんあの味を思い出した。

とうとうたどり着いたのだ。じいちゃんの味に。

目頭が熱くなった。そして涙が頬を伝った。

やっとじいちゃんの味にたどり着けて嬉しくて泣いたのだ。

暫く俺はその場でうずくまった。

涙がやっと止まって、俺は清々しい気分で家に帰った。

翌日、俺は心臓をバクバクさせながら、店に向かった。

今日もし雪野さんが来たら、俺は雪野さんに告白する。前から決

めていたことを今日実現させるのだ。

海を見ると、まるで俺を応援するかのようには太陽の光を反射してきらきらと輝いていた。

閉店時間になり、皿を洗っていると、扉の開く音がした。

驚きながらも冷静を保ち、雪野さんは静かに呟くように言った。

「はい。お湯の温度を九十四度にしました」

「美味しいです。恭介さんの味がします」

「ありがとうございます」

そして俺はあの言葉を伝えようと大きく深呼吸する。

「あの、一つ聞いてほしいことがあります」

「はい、どうぞ」

首を傾げて雪野さんは言う。

「雪野さんが初めて来店したとき、俺は雪野さんに一目惚れしました。」

そして雪野さんと話すうちにどんどん雪野さんのことが好きになっ

て。俺と付き合ってほしいです」

震える声を抑えて勇気を出して言った。

雪野さんの顔を見ると嬉しさと悲しさの混じった表情をしていた。

「お気持ちちはすく嬉しいです。それに私も大貴さんのことが好きで

す。でも、付き合えませんか」

俺はショックを受けた。

「ありがとうございます。ただ、一つ聞いてもいいですか」

「はい」

「付き合えないというのはどういうことでしょうか」

雪野さんは悲しそうな顔をして、そして意を決したかのような表

情をした。

「実は私、死んでいるんです」

俺は何が何だかよくわからなくなった。冗談を言っているのかと思

ったが、雪野さんはそんなことを言うような人ではないし、雪野

さんの真剣な顔でこれは冗談ではないということが伝わった。

「どういうことですか」

声を震わせながら聞く。

「もう私はこの世にはいないんです。私が一度恭介さんと会ったこと

があるというのは知っていますよね。私が交通事故に遭いそうになっ

た時、恭介さんが助けてくれたんです。何かお札にと伝えたところ、

コーヒールを飲んでほしいと言われて恭介さんのコーヒールを飲んだ時

に大貴さんのことを教えてくれました。またここに来ようと思った

のですが、その時には恭介さんは亡くなっていて。それでもまた行きたい、恭介さんが話していた大貴さんに会いたいと思って、ここに来ようとしたとき死んじゃって。思いが強かったのか、未練として幽霊になってここに来たんです。そして大貴さんと会って、私も一目惚れで大貴さんを好きになったんです」

長々とすみませんと謝る雪野さんだったが、俺はそんなことがあったのかと驚いたのと、最後の言葉が嬉しかったのもあって気持ちがあぐちゃぐちゃになった。どう整理すればいいかと思っていると、「でも」と雪野さんは呟いた。

「もう未練を果たしたので私は成仏します。短い間でしたが本当にありがとうございました。大貴さんのこと、好きになってよかったです」

「え」

「そんな、待ってください。俺、そんな」

頭の中がこんがらがって、一体何を言えればいいかわからなくなつた。

「来世は生きて会いましょうね」

そう言って雪野さんは消えた。

俺はまだ頭の中が混乱していた。でも確かに二つわかることがある。雪野さんはもういない。

そう分かった時、俺は泣き叫んだ。泣いて泣いて、ただひたすら泣くしかなかった。声が枯れるまで泣き叫んで、気づけば閉店時間を過ぎていた。放心状態で家に帰った。自分の部屋に行きベッドに倒れこみ、雪野さんのことを思い出して、また静かに泣いた。

「大貴。大貴」

誰かに呼ばれている気がする。呼ばれているほうを見ると、そこにはじいちゃんがいた。

「雪野さんとちゃんと話すことはできたか」

じいちゃんはどうして雪野さんとのことを知っているのだろうか。「多分、できたんじゃないかな。でもあまり自信ないや」

【部門賞 小論文部門 受賞】

「私とコロナと未来」

星槎国際湘南

二年 関塚 結



新型コロナウイルス感染症は現在もお感染拡大を続け、私たちの生活に大きな影響を与えています。このまま新型コロナウイルス感染症の感染拡大が進んでいけば、医療現場は逼迫し、救える命も救えなくなってしまう世の中になるかもしれません。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大を抑え、私たちの日常を取り戻すために私たちが今しなければならぬことは一体何でしょうか。私は命がけて戦ってくれている人がいるということを忘れず一人一人が強い意識を持つて行動することだと考えます。

私はとあるソーシャルネットワークサービスで、母子家庭である看護師の母親が娘あてに遺書を書いたという記事を読みました。そして、その記事の内容は次のようなものでした。

「あなたを産んで良かった。あなたを育てられて幸せだった。あなたが娘なのかわたしの自慢。わたしとあなたが暮らしてこれたのも看護師という仕事があったからと感謝をしている。だから、母ちゃんに万一のことがあったら、病院を恨んじやだめよ。あなたの花嫁姿を見たい。それが心残りになると思う。それでもわたしは仕事に行くね。感染しないように気を付けているけど、絶対に感染しない保証は誰にも出来ない。よく顔を見せて。よし！ 万一の時の最期のお別れが出来たから母ちゃん行ってくるね。この騒ぎが過ぎて、母ちゃんも無事だったら、二人で美味しいものを食べながら遺書を破ろうね。じゃ、行ってきます！」

私はこれを読んで、医療従事者の方々には毎日が恐怖と隣り合わせなんだと痛感させられました。

「私は感染しないから大丈夫。みんなも遊んでいるから。」そう思っ

「でも、気持ちを伝えることはできたんだろう」
どうしてじいちゃんは俺にそんなことを聞くんだろう。だけど俺は、

「うん」

と力強く言った。
「なら大丈夫だ。明日からまた頑張れよ。雪野さんの分もな」

そう言ってじいちゃんは消えた。
そこで目が覚めた。

「また夢を見たのか」
ひとり、誰もいない空間で呟く。

そういえば、何故俺は雪野さんが見えたのだろうか。じいちゃんは霊感があつたけど俺には無い。今になって疑問に思った。

そこで俺は気づいた。
もしあの夢が本当にじいちゃんが言った言葉なんだとしたら、俺と雪野さんを会わせたかったということじゃないだろうか。

「そっか。そういうことだったのか」

そう気が付くと、俺は少し心が晴れやかになるのを感じた。
悲しいという気持ちはまだある。でもそんな気持ちをずっと抱えていたら、じいちゃんも雪野さんも悲しむだけだ。

俺は店に行く準備をし、家を出た。今日も海がキラキラと輝いていた。

店に着いて、開店準備をする。看板を出し、皿を洗っていると、扉の開く音がした。俺は前を向いて言う。

「いらっしやいませ。海月珈琲店へ」

いました。しかし、このような考えでは新型コロナウイルス感染症拡大を抑えることは大変難しいことだと思います。感染の拡大を抑えるためには世の中のひとりひとりの人たちが今以上に強い意識をもってこの難局を立ち向かう覚悟をしなければ到底不可能なことだと思われまます。

そしてまた、新型コロナウイルスに感染した妊婦の搬送先が見つからず、自宅で早産、その結果新生児が死亡するという痛ましい出来事がありました。これは本当に医療が崩壊したもとで起きてしまった仕方のない出来事と言えるでしょうか。私には決してそうとは思えません。妊婦の身体は妊婦一人の身体ではなく、妊婦と子供の二人分の生命であり、新たに生まれてくる子供たちの未来のためにも私たちがひとりひとりが今の状況の中で、新型コロナウイルスの感染拡大を抑え、私たちの日常を取り戻すために命がけて戦ってくれている人がいるという現実を決して忘れず、全ての人たちが強い意識を持つて行動することが大切だと考えます。



【花二君ヲ想フ】

石合 友美菜 (星槎国際横浜鶴屋3年)

部門賞 エッセイ部門 受賞

星様が肯定してくれた未来

(Change 星様で変える未来)

星椋国際立川
三年 宮下 陽穂



私は星様に入る前、中学生の頃、ほぼ寝たきりの生活をしていました。その時は本当に生きるのが辛くて、がむしゃらに頑張ることすら出来ない自分を、否定してばかりの毎日でした。

そんな私にも夢がありました。それは、「普通の人と同じように学校に通いたい」というものです。ただ、当時、毎日をベッドの上で過ごし、母と同伴での一時間の外出にすら疲れていた私には、大きくする目標でした。それでも諦めきれず、倒れるように眠りながらも、二つの通信制高校の見学に行きました。

結果は、散々でした。

片方の高校では、オリエンテーションの場に一〇分と居ることが出来ず、帰ってきてしまいました。もう一方の高校では、親と一緒に授業を受けたいと告げても、理解が得られませんでした。

そうして気力も体力も使い果たし、学校に通うことを諦めていた、そんな時に母が見つけてくれたのが星様でした。

そこには、体験授業に来た私と母に「お母様もいっしょにやりましょうよ!」と、声をかけてくれる、先生がいました。

体調が悪くなくても自分から言えなかった私に、「大丈夫?」と心配してくれる先生がいました。

その後の面談でも、「陽穂さんが学校に来られるように一緒に頑張りましょう」と言ってくださり、心が温かくなりました。

そして私は決めたのです。星様に入学すると。

入学してからも、星様はずっと優しくかったです。なかなか先生に話しかけられない私に対して、積極的に話しかけてくださる先生。

「母と一緒に授業を受けたい」と言えば、「それで学校に来られる

部門賞 詩部門 受賞

見つけた

星椋国際帯広
二年 宮越 葵陽



その日は引き止める腕も叫び声も振り払って
思い切って飛び込んでみました

そこは誰の声もしない未知の世界で そこは息のできない苦しい世界で

そこは我々の世界ではない

そんなのは そんなのは 知っているのです
それでも思い切って飛び込んでみたのです

空を切った身体は水面に吸い込まれるように落下して
大きな飛沫が空に向かって手を伸ばしました

ごぼごぼ……ごぼごぼ……
そんなのは 嘘でした

身体を包む冷たくて優しい海水が 辺りをのびのびと泳ぐ魚たちが
まるで自分が飛び込んで来るのを待っていてくれたみたいでした

「そうか ここなんだ」
一面に広がる青い世界に 思い切って飛び込んで来ました
それは生涯最も美しい青色でした

部門賞 俳句部門 受賞

星椋国際川口
一年 松浦はる那



夏の夜 秋の朝へと 手をつなぐ

ようになるなら」と、快く許可してくれました。

「zomで授業を受けるのが辛い」と言えば、「大丈夫?」「どうしたらできるかな?」と、常に私が学校に通えるためにどうすればいいかを一緒に考えてくれました。

「テストを一日で終わらせることが出来ない」と言えば、「じゃあ、テストをする日を増やそう!」と、すぐに変わってくれました。

そして、気が付きました。星様がしてくれたことは、その時の私を「肯定」して、その上で「どうすればできるようになるか」を考えてくれていたのだと。

そして、星様の先生方や星様の「生徒に合わせて学校が変わる」という理念やお陰で、一人で授業を受けられるようになり、無事に三年生になりました。

私は、はじめに思い描いていたような「普通の人と同じような学校生活」はできませんでした。けれど、星様に通ったことで、「普通の人と同じような学校生活」では得られない力、自分も含めて《人を肯定する力》が身につきました。

その力によって様々なことが出来るようになりました。

その時の自分を肯定することで自分の不調をまっすぐな目で見ることが出来るように。他者の意見を肯定することで物事を多面的に見られるように。相手を肯定することで人の悩みに対して前向きに寄り添うことが出来るようになりました。

これからは、そんな星様で身についた力を使って、生きていきたいと思えます。

部門賞 短歌部門 受賞

星椋学園横浜ポートサイド校
三年 小島 千寛



金木犀 気高く香る オレンジに かわいた心
みち染みる

生徒会特別賞 俳句部門 受賞

星椋国際湘南
二年 沖山 遥菜



見上げれば 日差しに透ける 葉の青さ



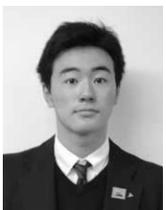
「星空を詰めた華」
中牟田 集 (星椋国際福岡中央1年)

「星槎大学長賞」

小論文「星槎で見つけた未来」

星槎国際川口

二年 小川 夕輝



学校というものが本当は大好きです。しかし、中学校時代の学校生活はあまり楽しくなかったと言ってもいいかもしれません。

僕にはチック症状があり、上手に話すことが出来ないし、言葉をはっきりしゃべることが苦手です。体も意に反して動きます。当然、中学の時は僕のことをわかてもらえずにいました。勉強もしつかり聞いているのですが、真面目に聞こうとしたり、一生懸命に取り組もうとしたりすると緊張してしまい、知らずにチック症状が出てきてしまいました。だから、人と話すのも苦手、勉強するのも苦手と、常にマイナスイキに物事を考えていました。進学に悩んでいるとき、中学校の先生から星槎国際高校が川口にあると聞いて、何回か説明会や体験に参加しました。参加しているうちに、星槎は先生たちが生徒を個人として見てくれるということが分かってきました。選択ゼミがあり、自分に合わせて時間割を組むことが出来るので、自分に合っているのではないかと思いました。

でも、選んだ本当の理由は、高校に進学したら「変わりたい」「成長したい」という思いとともに、「友達が欲しい」「本当の僕をわかてほしい」という思いが強くなったからです。

高校生活で頑張ろうと思ったことがあります。

中学校では少なかった友人を自分からたくさん増やすために、積極的に話そうと思いました。最初はうまく話せなかったし、緊張すればするほどチック症状は出てくるし……。右腕を左腕で押さえながら話すような状態だったかもしれません。でも今の私は中学生の頃と比べて、大分活力が出てきているように感じます。今までは何をすることも気が滅入っていました、最近はそのもよくなっているような気がしています。

今年度は生徒会の書記になりました。みんなを引っ張っていき、楽

力していきたいと思っています。

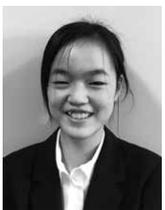
いろいろな場面をチャンスと捉えられるようになればきっとさらに成長していけると思っています。ぜひ僕の成長を見ていてください。

「星槎道都大学長賞」

小説「異の中の蛙」

星槎国際立川（フリースクール）

中学三年 室田梨紗子



少し雲が重ねられた大空を映すガラス窓を何枚も通り過ぎて、エアコンのある部屋に早足で向かう。

カットと照りつける太陽は、どうやら昼過ぎを知らせるみたいだ。

見えてきた、自分の部活動をする教室。

今日も今日とて不気味な怪談話や都市伝説に花を咲かせる――

怪談研究部。

所々引っかかるちよつと不便な教室のドアを開ける。

既に集まっている部員が僕に向かって挨拶をした。

「――だから私は……あつ、蛙間（ひるま）くんこんにちは」

横にいた部員の話を通し、僕に向かって軽やかな挨拶をした女子生徒は夏なのにその長い髪を縛らず下ろした。さながら向日葵のような明るさの持ち主である当怪談研究部の部長を務める鈴見ひな子先輩だ。

部長は彼女であるが、この部活を設立したのは彼女ではない。

しく学校生活を過ごそう、そして勉強も頑張ってみようと思っています。

それからもう一つ頑張りたいのは、陸上競技大会で全国大会に出場することです。一年生の時には出場することが出来ませんでした。二年生になって念願の定時制通信制の全国大会に出場することができました。記録は平凡なものでしたが、ますます意欲が出てきました。

高校生活1年半を通して、自分自身でも成長や変化が現れてきているような気がします。次の大会でもっと良い成績を残したいという意欲もありますし、もっといろいろな勉強をしたいという思いも出てきています。そして自分の課題でもある、コミュニケーション能力も向上させていければと思っています。

星槎の三つの約束にある「人を認める」。この「認められる」ことが、自分自身にとって重要なことだったということに気づかされました。とても重みのある言葉なのだ実感しています。今はクラスメイトや他学年の生徒たちとも気負うことなく話すことができました。みんな僕を稀有の目で見ないのです。僕自身をみんなが認めてくれたのです。高校に入学して中学の時に怖い思いをした先輩がいました。運命的な出会いでした。心の中は恐怖でいっぱいでした。ところがその先輩は雰囲気は全く変わっていました。

「怖い」いえ、優しく変貌している先輩がそこにいて、とても驚きました。何かあったのだらうかと気になりました。勇気を出して話に行きました。すると先輩は僕のことを覚えてくれていて

「中学の時はキック当たってごめんな。」

と言ってくれたのです。僕は思わず泣きそうになりました。恐怖より驚き、驚きより嬉しい気持ちに変化していきました。先輩も星槎国際川口で変化成長しているのだと痛感しました。

僕はしゃべることが苦手です。でも自分なりに頑張つて考え続けました。例えば話す時に心の中で（あ、い、う、え）「お願いします。」や腕や指を使つてリズムを作り、何とか言葉を出そうと努力をしている自分にも気づくことができました。

まだまだ、先は見えませんが、自分のできる事、やりたい事を星槎で目指していきたいと思えます。そして僕自身も人を認めるように努

「おー、遅いじゃん 蛙間くんよお」

「うるせえ、お前が――」

同じクラスだというのに既に部屋に着いている方がおかしいのではないかと、という言葉を無理矢理飲み込んだ。

からかってきたもう一人の部員であり、先ほど鈴見先輩と話していたこの男こそ、この怪談研究部の設立者である吉上だ。

それとなく雰囲気似ている鈴見先輩と吉上はいとこ同士で、仲も良い。

「早速始めようとしたんだけど……残念ながら私からは特に仕入れた噂はないかなあ。二人は？」

怪談研究部の活動は、まずそれぞれが新しく仕入れた怪談や都市伝説の情報を、交換することから始まる。

「……ひな子あれは？ あー、出席確認」

「いいよもう、やんなくても。で？ 晴と蛙間くんは何か仕入れてきた？」

出席確認といっても人数が少ない部活なのでわざわざやる機会の方が少ない。そのぐらいにはマイナー部活なのである。

鈴見先輩の質問に、僕は首を横に振る。

そんな中、吉上だけはひとりでニヤニヤとしていた。

「俺はある。ずばり、『御玉（みたま）神社の神隠し』ってやつよ」

「……御玉神社の神隠し」

僕はテイストの違う怪談の噂に思わずオウム返しをした。

鈴見先輩も驚いたのか、目を大きく開いて困惑していた。

「あそこの神社に井戸があんじゃん、そこに『願ひ事』をしてから、

五円玉を投げると……祀られている神様が目を覚まして、投げた人を攫っていくらしいんだよ」

「願い事をする意味あるの?」

思わずツツコミを入れる。

吉上は怪談ならなんでもいい精神で生きている節はあるので、どんなに辻褃が合わないでため都市伝説でも、やらせくさい古い心靈番組でも、構わず「これは本物だ、違うない」というものだから、正直信用ならないところはあつた。

吉上はチツチと舌を鳴らしながらまたニタリと笑う。

「それなら誰も攫られない。神様はな、その『願い事』を別の世界で叶えさせて下さるから攫うっていう話なんだよ」

「ただの怖い話じゃないってことか」

「そういうこと。どう? 興味、出てきた?」

断つても断り切れない雰囲気徐々に吉上から出てきている。僕が吉上の圧に押し黙ってしまっていると、鈴見先輩が口を開いた。

「人攫いはやっぱり怖いよ、やめよう 私は反対」

緊張した顔で鈴見先輩は吉上に訴える。

吉上は多数決にしよう、と結局僕に判断を委ねる形になってしまった。

鈴見先輩の本気で怖そうな顔と、謎の吉上の圧に、自信。

それから滲み出る「覚悟」を感じ取り、男としてこの吉上の情熱をスルー出来なかった。

「分かった、僕は吉上を信じる」

吉上はやっぱ蛙間は分かってくれた! と上機嫌になった。

て知っている生徒はいなかった。

高橋さんや吉上に聞いてみたら? という意見もままあつた為、皆が本気で知らないのだと裏付けられた。

タブーだから話さない、という理由ではなさそうだった。

となると吉上の聞き間違いや、話を盛った結果であつたり、僕が騙されていたりする可能性が出てきた。

確かに、吉上はああ見ても優しい性格だ。

噂がなくつつまらなさそうにしている僕達を、楽しませようとしてくれたのかもしれない。

もしこれが吉上のついた優しい嘘なら、あの「覚悟」の意味も頷ける。

でもなんとなく負けた気がして、悔しいのもまた事実。

その時教室のドアが勢いよく開かれた。

現れたのは少し息が上がっている吉上だった。

神社から走ってきたと思われるが、その顔は曇天のように少し悲しそうだ。

「おはよう蛙間、悲報持ってきたけど聞く?」

「取り壊し?」

「いやあ、俺としたことが。リサーチ不足っていうかさ」

吉上の言う悲報は御玉神社の井戸の取り壊しの知らせだった。テレビの取材などで取り上げられた割にはあつさり取り壊されるんだな、と思つたがどうやらネットニュースにはなつたみたいだ。

井戸について吉上が宮司さんに尋ねたところ、「そろそろ取り壊すことになってね」と言われたそうだ。

「宮司さんはいつ取り壊すって言ってたんだ?」

「明日になるともう井戸は見られならしい」

御玉神社は願い事の噂が有名である。

街の人々のみならず、開運スポットとしてテレビに取り上げられたこともあるのだとか。

外国でも噴水にコインを、谷にコインを……なんて観光スポットはよくよく耳にするが、近所にそんな噂あつただなんて知らなかった。

そういうところは流石吉上、といった所か。

次の日。

神隠しについて朝の時間を利用し、クラスメイトに聞いてみることにした。

吉上は例の御玉神社に寄ってから学校に来るらしく、僕一人のみでの聞き込みとなった。

「高橋さんなら知っているかもしれないから、あの子にも声かけてみて!」

複数人のクラスメイトにそんなことを言われたので、高橋さんに聞いてみることにした。

高橋さん、といえは本を読んでいるイメージしか思いつかなかつた。彼女とはそんなに喋つたことがなかつたような、喋つたような……あやふやな印象を持っていた。

そんな高橋さんに聞いてみると

「オカルトは詳しい方だと自分でも思っているんですけど、知りませんね。ごめんなさい」

と、井戸の願い事は知っていたみたいだったが神隠しについては知らないようだった。

その後もいろいろ聞き込みを続けてみたものの、神隠しについ

「そんな急な話……」

あまりの猶予のなさに二人で肩を落とす。

珍しく「呪い」だの「幽霊」ではない話だったので、いつもよりやる気はあつただのだけれど。

タイミングの神様は今回、微笑まなかつたらしい。

「鈴見先輩に連絡しといたら? 僕みたいにもうなんかやってる可能性あるし」

「あー」

少し気まずそうに吉上は僕から目をそらす。

喧嘩でもしたのだろうか。

それとも、神隠しが本気で嫌だつた鈴見先輩が怒つたのだろうか。温厚でめつたに怒らない鈴見先輩に限って、そんなことはないだろう。

ほーつとしている吉上に声を掛ける。

「吉上?」

「俺から伝えとくよ」

その後の吉上は、珍しく自主的な活動をした僕をからうことにはたらしい。

いつも通りの調子になった吉上を見て少し安心した。

もし本当に困っていそうだったら話を聞こう、吉上は仲間なのだから。

朝のやりとりで調べる噂もなくなつてしまったので、また今日も駄弁つて終わらさう。

今にも雨が降り出しそうな、不穏な天気。

もう少しで、もう少しで部屋に着こうとした時部屋から、紛れもなく部屋から。
大きな音がした。
思わず足が止まる。

部屋のドアを開けると目の前に思いつめた顔の鈴見先輩がそこにいた。

驚いてドアの前に立ち尽くしていると、僕を避けて鈴見先輩は走り去って行った。

部屋の中には俯いた吉上が座っていた。

恐らく口論があったのだと思うが、突然の展開にまだ頭が回らない。

とりあえず今の状況は、鈴見先輩がいなくなっちゃった、と。

両者の言い分を聞くためにもここは鈴見先輩を追いかけたほうがいいだろうか？

だが吉上が僕の考えを察知したように止める。

「追いかけていい」

「でも」

「いい、頭を冷やさせた方がいいから」

なんで止めたんだよ、と聞くと吉上は疑いの顔を見せた。

少しばかりの沈黙、遠くの方で唸るような雷鳴が轟いた。

微々たるエアコンの音だけが、部屋に流れる。

ドアの前で立っている僕を、獲物を見つけたような目つきで吉上は睨む。

——沈黙は、吉上によって破られた。

「本当に、本当に覚えていないんだな？ 本当に何も知らない、無知だよな」

鈴見先輩に聞いたほうが早そうだ。

だがその思いは杞憂（きゆう）に終わったようだ。

また胸に雷鳴が響き、コングのようにその雷が合図となった。

「神隠し……あれは本当、数人攫われている」

驚愕のカミングアウトに耳を疑った。

残念なこと間違いいはないようだ。

「なんとなく願いを叶えてくれる世界に旅立つようなもんだし、誰も帰ってこない。湿っぽい世界、誰もいたくないし」

と、吉上は呟いた。

独白のように、ぼつりと、雨の降り始めのように。

「ひな子も知ってたんだよ、本当は。でも、行った先の世界が幸せならいいんじゃないかって。学校にも黙ってようって……。でも俺は違うと思ってる、戻らなきゃそれはその『湿っぽい世界』を生きている人に失礼だらって思うんだ」

例えるのなら、人生という時間を省いて極楽に行くような……

そんなセコいやり方であると吉上は主張した。

大人側はどうなっているか分からないが、騒ぎになっていない辺り、攫われたと認識されていないのかも知れないと苦しそうに呟いた。

二人で背負うには重すぎるものを、僕には背負わせないように。隠して、隠して……

「言ってくれば僕も背負えた」なんて保証はない。

言葉が見つからない、頭が動かない。

あまりにも急すぎて、突然で、事の重大さが僕には追い付けない。

意図が、意味が分からなかった。

何のことを言っているのか、そんな真面目になるほどなのか。

ここは正直に答えるのが一番いいだろう。

「吉上の言っている意味が分かんない」

「……………ハア。ならいいや、いやよくねーけど」

なんとか言葉を紡ぎだした吉上だったが、煮え切らないようだ。思い悩む様子の吉上に、話聞こうか？ と尋ねても

「話にならないからいい」

「信じてもらえないからいい」

と頑なに話さない。

もしかしたら僕が介入するのは間違っていたのかもしれない。

知ったらショックを受けるようなことを、隠しているのかもしれない。

そんな雰囲気は感じなかったけれど、ぎこちないやり取りもあったのも思い出せる。

……やっぱり鈴見先輩との間に何があったのか、知りたい。

だって二年ずっと、一緒にやってきたんだから。

僕の知らないところで勝手に仲悪くなって、ギスギスするなんて納得出来ない。

今の気持ちを伝えようと足を吉上の方へと踏み出す。

吉上は目を合わせようとしなかった。

「僕は吉上の言った神隠しを信じた。だからまた、僕は吉上を信じるよ。僕は鈴見先輩の話もお前の話も聞くし、信じる」

——もしこれ以上、吉上が僕に秘密にしておく判断をしたならば、

「ひな子、探してくるわ」

再び訪れたしばらくの沈黙は、またも吉上が破ることになった。

鞆も持って、席を立った。

邪魔になるだろうと僕はその場からどいた。

鈴見先輩と一緒に探すことも出来ただろうけれど、当事者である吉上が動き出す決断をしてくれたのだから出る幕はないと判断した。

どこに行ったかの算段は付いているようで、すぐ戻ると吉上は言った。

「分かった。三人で、神隠しについてもう一度話そう」

そうだな、と僕の言葉を肯定した吉上はすれ違いざまにこう呟いた。

「蛙間、ごめん 本当にごめん」

ぼつんと、部屋に存在する人間が一人。

二人の喋り声がない部屋は物足りなくて仕方ない。

ふと、目に入った部員表。

……そういえば入部してから一度も休んでいないな、とその薄い部員表を手を取った。

「部長 鈴見ひな子」から連なる名前は僕と吉上。

そしてクラスのおカルトマニア高橋さんの名前。

その他見知らぬ生徒の名前が数人分。

鈴見先輩、吉上、僕以外のメンバーの名前のところには斜線が入っ

ていた。

斜線の入っているメンバーの出席項目には、出席したとされる丸が赤ペンで記されていた。

知らない、知らない。

僕の記憶にはこの斜線が入っている人の記憶はないはずだ。でもあやふやで、どうだったのかわからない。

まだあの二人は僕に何かを……？

いや、吉上はまだ分からないが鈴見先輩は確実にまだ何か、隠している。

知らない部員、これこそ幽霊部員のような部員がいるとでも言うのだろうか。

まだ、この部活には秘密がある？

また僕は一人、無知に守られるのか？

それは嫌、嫌に決まっている。

覚悟を決める、事実を知ろう。

背負う準備は出来ている、さあ――

今漕ぎ出して、真実の海に出かけよう。

「鈴見先輩」

「あ、さっきはごめんね。急に部室、飛び出しちゃってさ」

しばらくして戻ってきた鈴見先輩は困った顔で僕に謝った。

吉上はまだ戻ってこないらしい。

僕は息を短く吸って、鈴見先輩に向き合う。

「いえ、気にしてないので大丈夫です。それより鈴見先輩、神隠しと……」「部員表に見覚えのないメンバーの記載」について、聞いて

場所は御玉神社前。

先ほどの雷、もとい雨は部活動という名の沈黙タイムの内に終わり（結局吉上は帰らなかった）、未だスッキリはしないが雨は降っていない微妙な天気となった。

今まで出てきたキーワードを整理するため、なんとなく神社に下校ついで寄ってみた。

このころがらがった頭で宿題なんてこなせる程、僕は頭が出来ているわけではない。

まず神隠しの噂について。

「神社の井戸に五円玉を投げると願いが叶う」

ここまではクラスメイトが知っていた噂だ。

「その願いを叶えるために神様に攫われて、願いが叶った世界に連れられる」

ここからは吉上と鈴見先輩が知っていた話である。

その後の部分では実際に起こっていて、クラスメイトは認知していなかった。

ここで一つ目の疑問、「何故二人は神隠しを知っていたのか」が浮上する。

そしてもう一つ。

「誰が神隠しにあったのか」が二つ目の疑問である。

名前はおろか、学年でさえ二人は言わなかった。

普通神隠しが発生しているのなら、僕に信じてもらおうという目的ならば具体例を出すはずだ。

鈴見先輩はまだしも、神隠しを知って欲しかった吉上までも言わないのはおかしい話である。

あと気になるのは……。井戸の取り壊しが迫っていること。

もいいますか？」

明らかな動揺の感情が鈴見先輩の瞳を揺らした。

泳ぐ先輩の目を捉えて、話すよう促す。

「話さなきゃダメかな。晴からも色々聞いているんでしょ？ 決まっていたことだとは思ってないけど」

と苦笑いを見せた。

先輩は最初、神隠しについての話題が出たときに「やっぱり」という言葉を口にしていった。

どうも引っかかっていた。

初めて知るはずなのに、やっぱりとは？

しかも神隠しを調べることに反対していたのだ。

吉上は恐らく鈴見先輩を説得し続けて、僕に協力を求めるために神隠しについて話したのだろう。

「……この、斜線の子達がなんかやらしたわけじゃなくてね。なんて言ったらいいんだろうな、話すの嫌だな」

「この人達は以前、部活に所属していたんですか？」

バツが悪そうな顔をした。

まだ話す決心はついていないらしい。

「この子達はこの怪談研究部に『所属している』よ。うん、してる。……私からはもう言えないよ、これはね蛙間くん、貴方のためなの」

嘘は言っていない、それは鈴見先輩の覚悟が見えたからだ。

吉上のあの時と同じ、僕の為の真実を教えてくださいました覚悟。

光は見えてきた、もう少しで全てが――。

「蛙間くんは『こちら側』なの。だから今すぐ神隠しについて調べるのはやめて欲しい、貴方が傷付けてしまう」

神隠しの元凶である井戸がもうすぐ壊されるのに、なぜ鈴見先輩は「すぐに噂を調べることを止めたのか」

今、僕や吉上を止めなくても、鈴見先輩の「神隠しには触れないでおこう」という考えに則れば、井戸が壊されるのを待たばいいだけである。

知らないはずの噂を知っている『矛盾』。

信じさせたいにも関わらず、具体例を開示しない『矛盾』。

噂には触れたくないのに、井戸が壊されるのを待たない『矛盾』

例えば、神隠しをされた人の「存在」は元の世界に残っていて

それが斜線の入ったメンバーなら。

怪談研究部で、「願回事」だけの検証を神社でしたのなら？

それを見ていた二人は僕を……いやでも、吉上は

吉上は、僕をどうしたいんだ？

それに、存在だけ残るなら部活に入っていた方が自然だ。

いや待て、今までの考えは二人が自ら噂に足をつこんだ場合だ。

もし巻き込まれてしまったり、やむを得なかった場合は？

知らないはずの噂を知っている『矛盾』は知らざるを得なかった、やむを得ず知ってしまった噂だったり。

信じさせたいにも関わらず、具体例を開示しない『矛盾』は具体例を開示できない、そもそも具体例がない場合になる？

噂には触れたくないのに、井戸が壊されるのを待たない『矛盾』は井戸が壊されるのを待てない、ということ？

知らざるを得ない噂を僕に隠して、具体例が言いつらくて、井戸が壊されるのがカギになるとある神隠しのケース？

何かが足りない、あの二人はなんの真実で僕を守ってくれている？

何がきっかけで苦しまなければいけない？

思い出せ、思い出せ。

二人が、共通して苦しんでいた時に真実が顔を見せているはずだ。

「蛙間くんは『こちら側』なの」

「『湿っぽい世界』を生きている人に失礼だろうって思うんだ」

もし、神隠しをされても存在が残って、行方不明とならないのなら――

あの二人こそ、「神隠しをされた人間」ということになる……！

鈴見先輩はこの理想の世界から帰りたくない、けれど吉上は責任を感じて「井戸が壊される前」に元の世界に帰りたい。

神隠しの噂を話して僕を人質にするつもりで、吉上は鈴見先輩と帰ろうとした？

おそらく鈴見先輩の反応を見るに帰る方法は井戸が関わっているんだろう。

僕は二人の「なんらかの理想を叶えた世界」に住んでいるから、「湿っぽい世界」を知ってほしくなかった？

とりあえず、神社に入ってみよう。

タイムリミットは実質今日。

明日にはもう見られなくなる井戸、事の元凶様をお目にかかろうではないか。

「九割正解」

ノータイムで答えられ若干驚いたものの、二人が神隠しにあったのは間違いないようだ。

だが完全な正解ではなかったようで、残り一割についての説明を求めた。

「残り一割より、俺に聞きたい事とかないわけ？ 俺らがどんな世界にいたか、どうして神隠しをされたかとかさ」

「……」

誤魔化された気もするが、その例に挙げた二つも気になったのでそれをそのまま質問した。

その質問に答えたのは吉上ではなく、神社に入ってきたもう一人の神隠し被害者のである

鈴見先輩だった。

「映画みたいな世界だよ、バンデミックつてやつ？ ウイルスが世界中で流行っちゃってさ。何万人の人が死んだ……そんな世界」

突然割って入ってきた彼女の顔を、吉上は見ようとしなない。

それを知ってか知らずか、鈴見先輩は吉上だけに話しかけた。

「そんな世界に戻るっていうの？ 冷静に考えてみてよ、不便でしかないじゃない。修学旅行も……卒業式だってまるまる潰れて」

涙目になりながら、吉上に最後の説得をする鈴見先輩を見て、その世界がどれだけ残酷かを薄々感じ取ることが出来た。

窮屈で何も出来ない、小さな存在に命の危険を感じながら暮らす日々。

きつと、この世界は「そのウイルスが存在しない世界」。

二人はこの世界に来たい、と井戸に五円玉を……

御玉神社は小さい公園ぐらいの大きさで、お祭りなんでもつてのほかな狭さだ。

足を踏み出せば神社特有の緊張感が身を巡る。

入ってすぐ右手に体を向ければ、噂の井戸が見えた。

だがそこには井戸の先客がぼつんと立っていた。

「お、蛙間じゃんどしたん？ もしかして」

気付いちちゃったりした？

スクールバックを持った吉上が振り返った。

吉上と鈴見先輩は神隠しの当事者本人だ、という確証はない。ただ、それぐらいいしか辻褄が合わない。

「あれ、もしかしてお前……案外何も考えなかった？」

「いや、そうかもって考えはある……けど」

自信がなくて思わず言葉を濁してしまふ。

吉上は井戸に寄りかかって、僕が話すまで待つ意思を示した。

「信じて貰えないでしょって感じの、ほら オカルトな話なんだよ」

僕がそう言い切ると、吉上はため息と同時に呆れたように笑った。

「怪談研究部の俺が信じなくて何を信じるんだよ。それに、蛙間は俺の神隠しの噂を信じてくれたからこそ来て来たんだろうが」

確かに、吉上晴はそういうおめでたい男だった。

もう一回、吉上の信じる僕を信じよう。

「上手く説明できないから、単刀直入に言うけど、吉上と鈴見先輩……『神隠しされた側』ってことかなって思ったんだけど」

「この井戸がなくなれば元の世界を忘れられるって、高橋ちゃんも」
「その高橋も罹（かか）ったんだよ……なあ、ひな子。今、元の世界で頑張ってる病氣と闘ってる高橋を、他の部員を見捨てるのかよ」

お前は部長だろ、と吉上は強く言い放った。

吉上の発言により斜線の入ったメンバーは、その「ウイルス」に罹って闘病しているメンバーということだと気付かされた。

闘病中なら神社に足を運ぶことも出来ない。

だから、怪談研究部全員が攫われたわけではないということか。部活仲間がウイルスにやられ、頼る先はもう「神頼み」しかなかったってしまったのだろうか。

――僕だってそんな状態になったら神頼みの一つ、すると思う。

「この世界だと高橋ちゃんも部活にこそいないけど、元気に生活できているの。もう私、電話越しの辛そうな声を聞きたくない」

鈴見先輩はきつく拳を握った。

どちらの言い分も分かる、だからこそ辛くて見ていられなかった。だから二人は僕をこの真実から遠ざけようとした、僕は二人の優しさを無下にした。

……背負うものの重みも、理解できずにのうのうと考えていた。

「ひな子それは、それはもう『逃げ』だ。自己中なこの願いをなかつたことにしようなんて言わない……俺らは俺らの世界に帰ろう」

吉上が鈴見先輩に、五円玉を差し出した。

もう一度願うと帰ることが出来るとか、そんなところだろうか。鈴見先輩は僕に目を合わせて、こう言った。

「ごめんね蛙間くん、でもこれは貴方のため。またね蛙間くん、明日。

この世界の私と仲良くね」

鈴見先輩は寂しそうな眼を伏せて、吉上の差し出した五円玉を受け取る。

吉上は一歩前に出て、僕の肩を持った。
力強く抑えられて振り払うことが出来ない。

「蛙間、お前の世界は……いやなんでもない」

元気でな、と吉上は最後まで顔を見せることはなかった。
ウイルスが流行っている世界から来た吉上の元気でな、はとても重く感じた。

僕は何も思いつかずに、ただ「元気でね」と、二人の健康を切に願う言葉を送ることしかできなかった。

二人が井戸に五円玉を投げ、揃って手を合わせる。
数秒経ってすぐに耳を破るような勢いの暴風が辺りに吹いた。
砂埃が目に入らないよう、反射的に目を瞑った。

風の音が静まり、黒い視界を少しずつ開けばそこにはもう二人はいなかった。

結局、残りの一割不正解の話を開きそびれた。

明日になれば井戸が壊されて、異世界の二人の記憶はこの世界の二人の記憶に上書きされるのだろうか。

なんかもったいないな、と思いつながら僕は神社を後にした。

カラスの鳴き声が辺りに響き渡る。

淡い数色の空が頭上を覆うその町で、マスクを付けた学生が三人、神社の前で喋っていた。

「ひな子はなんて願うの?」

「私は『あのウイルスが存在しない世界になりますように』って」

「俺もそんな感じ。蛙間は?」

「……僕は、『この世界とさよなら出来ますように』って」

言い過ぎじゃない? と女子生徒が笑った。

それを願う予定の男子生徒は緊迫した表情で言葉が続けた。

「蛙間が辛そうにしているのなんでもう見てられないんだよ」

こんな世界から神様が連れ出してくれるのなら本望だ、と男子生徒は言う。

それもそうだね、と女子生徒がクスクスと肯定した。

三人が神社に入ると、揃って足並みは井戸に向かった。

「蛙間、五円玉貸して」

「ほらよ」

井戸の前に並ぶと多少ぐだりはしたものの、女子生徒が姿勢を改めた時、揃って残りの男子生徒たちも五円玉を手に姿勢を正した。

「じゃあ、投げるよ」

一瞬だけ宙に舞った三枚の五円玉。

夕日を反射して、井戸にぽとんと落ちた。

【中学生部門賞 詩部門 受賞】

愛

星槎学園北斗校
三年 木全 弦也



「愛ってなんだろう。」

「それはね、答えは無いんだよ。」

「愛ってなんだろう。」

「それはね、目に見えない、大切なものなんだよ。」

「愛ってなんだろう。」

「そんなの、あって無いようなものだよ、気にするな。」

十人十色、

みんな答えが違う

それが愛。

【中学生部門賞 俳句部門 受賞】

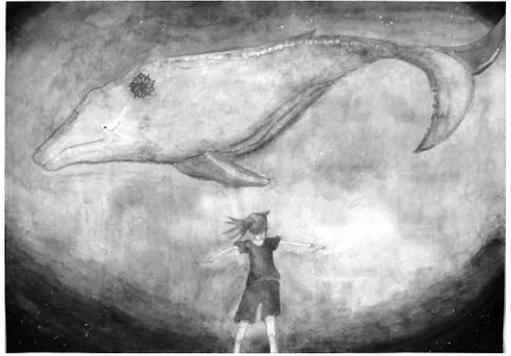
星槎もみじ中学校
三年 平泉 颯



虹が出て 笑う間も無く 消えてゆく



「D raw a dream !」
野田 明日香 (星槎国際高松3年)



「空と海」

鈴木 亜紗美 (星槎国際郡山 2年)



「贈り物」

笹嶋 樹 (星槎国際仙台 1年)



「全てを乗り越えて」

藤田 美結 (星槎国際帯広 1年)

星槎文芸大賞 実施要項（一部抜粋）

1. 目的

文芸創作活動に取り組むことで、関わり合いを大切にする星槎で育まれた感性を磨き、コミュニケーション能力、自己表現力を育て、作品を通して全国の仲間との交流の中で発見と感動の場をつくる

2. 応募資格

星槎国際高校及びフリースクール生、星槎学園高等部及び中等部、星槎中学校、星槎もみじ中学校、星槎名古屋中学校在籍生徒

3. 募集部門

- ①小説
- ②小論文
- ③エッセイ
- ④詩
- ⑤俳句
- ⑥短歌

4. 応募規定

- ①校内選考後の出品は生徒一人につき、一部門にしほり、作品数も一点に限る
- ②応募作品は未発表作品に限り、他賞との二重投稿を禁止する
- ③受賞作品は発表時に修正を求める場合がある
- ④受賞作品の出版権などの諸権利は星槎国際高等学校に帰属する

編集後記

星槎学園大宮校 合田 晃治

星槎文芸大賞が星槎オリビックの部門となつて、今年で七回目の開催となりました。今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの感染拡大により、各校厳しい状況の中、本作品集発行のため、ご協力いただきまして誠にありがとうございました。

今年度は、各校で選考された二〇作品が集まりました。例年にも増してより洗練された、すばらしい作品が多く集まりました。

今年度も特別審査員として参加していただいた伊藤玄二郎先生（かまくら春秋社代表取締役、星槎大学教授）のご配慮により、今年度の受賞作品を文芸誌『詩とファンタジー』にて誌上発表していただき、著名な方々から講評をいただくことができました。また昨年度から詩・短歌・俳句部門でスタートした中学生部門もますます発展し、中学生から高校生まで活躍の場を広げることができました。

星槎国際高校は、二月に開催される北京オリビックにフィギュアスケート男子部門で出場する鎌山優真さんをはじめ、さまざまな種目でアスリートの生徒たちが大活躍しています。今後においても、星槎の若い力が発揮されることはまちがいありません。

スポーツだけでなく「文芸の星槎」も、より活躍の幅が広がることでしよう。

日々の暮らしのなかで、私たちは、楽しかったこと、うれしかったこと、つらかったこと、悲しかったこと、さまざまなことを経験します。またふと浮かんでくるフレーズがあります。それらは過ぎゆく時間の流れの中に「思ひ出」としてうつらと記憶に残りつつもやがて消えてゆきます。私たちは何かを「書く」ことによつて、それを過ぎゆく「時間」の世界から、過ぎゆくことのない世界に移し替えられます。

「書く」というのは、消えゆく現象を不滅の世界に変えていく行為だと言えます。書きとどめたものが、かりにつらい経験であっても、時間が経てその記録を読み返したとき、「ああ、あのときあんなことがあったな」となつかしく思えるものです。またふと浮かんだアイデアも書き留めておかないと「あわ」のように消えてしまいます。「書く」ことで永遠の記憶になります。

今回各センターから送られてくる皆さんの作品群に圧倒されました。皆さんから提出された作品からは、感動や思いや考えがひしひしと伝わってきました。

この作品集を読んでいたただけで、読んだ人の心に「さざなみ波」が立つてでしょう。「あ

あ、こんなことを考えている人がいる」「すてきな言葉で思いが伝わっている」「こんな見事な言葉を使える人がいる」この作品集から共感の輪は大きく広がると思います。ぜひ多くの皆さん、「思い」を言葉に変えてみましょう。塩谷実行委員長末筆ながら、本作品集刊行に至るまでご協力いただきました。塩谷実行委員長はじめ、各委員の先生方、各校舎に担当者様、誠にありがとうございました。そして、素晴らしい作品をエントリしてくださいました生徒の皆さんに御礼申し上げます。来年度もより感性を発揮した作品の応募があることを楽しみにしております。

編集委員

監修 塩谷 貴男（文芸大賞実行委員長）
編集長 合田 晃治（星槎学園大宮校）
委員 河口 優花（星槎学園大宮校）
委員 高橋 佑介（星槎学園大宮校）
委員 須田 心作（仙台学習センター）
委員 脇屋 洋子（横浜鴨居学習センター）
委員 天野 桂一（富山キャンパス）
委員 大平奈美佳（那覇学習センター）

星槎文芸大賞

令和三年度受賞作品集

令和四年一月二十四日発行

編集者 前田 豊

発行者 星槎国際高等学校

〒〇〇四一〇〇一四

北海道札幌市厚別区もみじ台北五丁目二二―一

TEL 〇一一八九九―三八三〇

FAX 〇一一八九九―三八三五

印刷 (株)横濱綜合写真